

# 感染症発生動向調査委員会報告 7月

## 今月のトピックス

O157等、腸管出血性大腸菌感染症の発生が、増加中です。

麻しんの流行は、ほぼ終息しました。

ヘルパンギーナ、手足口病など、夏季に流行する疾患の動向に注意してください。

### 【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：84か所、内科定点：55か所、眼科定点：15か所、性感染症定点：26か所、基幹(病院)定点：3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年6月18日から平成19年7月22日まで(平成19年第25週から第29週まで。ただし、性感染症については平成19年6月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

### 平成19年 週 月日対照表

第25週	6月18～24日
第26週	6月25～7月1日
第27週	7月 2～ 8日
第28週	7月 9～15日
第29週	7月16～22日

## 全数報告疾患

### < 腸管出血性大腸菌感染症 >

毎年、夏に報告が多くなります。今年も、6月から報告が増え、7月は26日現在で21例となっています。年齢の内訳は、10歳未満が7例、10代が2例、20代が4例、30代が3例、40代が1例、60代が2例、70代が2例でした。

小児でも、生肉の摂取が原因となっている報告があり、注意が必要です。

	4月	5月	6月	7月	8月	年間 (1～12月) 計
平成16年	2	5	10	24	18	81
平成17年		4	6	16	24	76
平成18年	4		2	11	12	64
平成19年		2	9	21		

### < レジオネラ症 >

今年は報告が目立ち、1月に1例、4月に4例、5月に2例、6月に6例、7月に2例と、現時点での合計が15例で、平成17年の8例、18年の7例に比べて、かなり多くなっています。

レジオネラ症については、平成15年4月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致命的になる場合があります。注意が必要です。

その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。  
([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html#zensu](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu))

## 定点報告疾患

### < 咽頭結膜熱 >

昨年は、立ち上がり5月と早く、長期間にわたり流行しました。今年は、6月に入り例年並には増加してきたものの、その後横ばい状態で、第29週は定点あたり0.39と、2週続けて減少しました。区別では、磯子区での発生が引き続き目立っており、定点あたり3.0と、第20週以後24週を除き、ずっと警報開始レベルの2.0を超えています。他には、港南1.3、港北1.0が多めでした。全国では、第28週は0.53で、横ばいから少し減少しました。まだ、今後の動向には注意が必要です。

### < A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

今年も、昨年同様、高いレベルで増減を繰り返しており、過去5年間と比べても一番高い値が続いています。ただ、第24週以降は減少が続き、第29週は定点あたり1.27となりました。区別では、定点あたり4.0と引き続き都筑区での発生が目立ちます。全国でも、昨年同様高い状態が続いていますが、第23週以降減少が続き、第28週は定点あたり1.58です。まだ、動向には注意が必要です。

<手足口病>

例年、第28～29週にピークがありますが、横浜市では、昨年は秋に小さな山がありピークは第41週でした。今年も昨年同様、6月にあまり増加しませんでした。7月に入り、第28週に定点あたり1.29になりましたが、第29週は1.20と減少しています。区別では、瀬谷が定点あたり4.7、港南が2.8と、他区に比べて目立ちました。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.85、川崎市は1.12と、どちらも横浜市より高く、全国でも、第19週以降増加が続き、第28週は1.87でした。今後の動向には注意が必要です。

<伝染性紅斑>

横浜市では、過去3年間と比べて、低めで横ばいの傾向が続いていましたが、第27週以後減少し、第29週は定点あたり0.33でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.64、川崎市は0.79と、どちらも横浜市より高めです。全国では、増減はあるものの、過去5年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第28週は定点あたり0.79でした。妊婦等を含めて、引き続き動向には注意が必要と思われます。

<ヘルパンギーナ>

夏季に流行する疾患です。横浜市では、今年例年に比べて立ち上がりが遅かったのですが、6月後半から増加してきて、第29週は定点あたり4.85になりました。区別では、青葉11.2、泉10.7、瀬谷10.7、金沢10.4、緑8.3、港北6.4と、6区で警報開始レベルの4を超えています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は5.72、川崎市は9.36と、どちらも横浜市よりかなり高い値です。全国では第19週以降増加が続いており、第28週は4.35です。流行期を迎えていますので、引き続き注意が必要です。

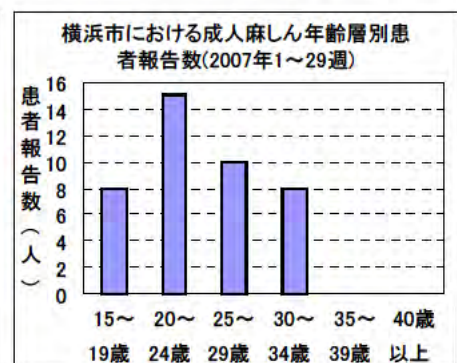
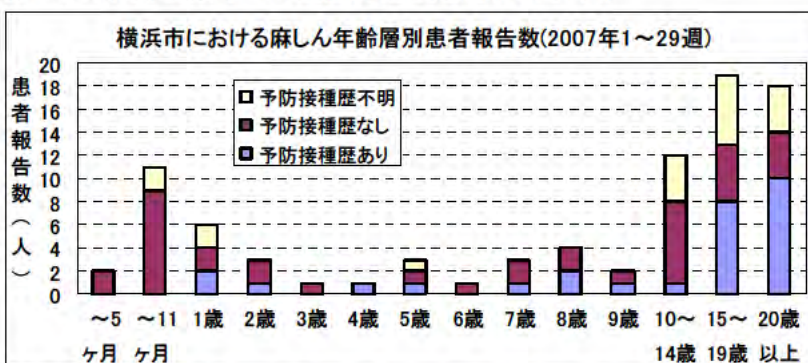
<麻しん>

4月から始まった、千葉県、神奈川県等、南関東を中心にした麻しんの流行は、収まってきているようです。横浜市では、第14週から続いていた、小児科定点からの患者報告は、第22週の14人をピークに減少し、第29週は1人でした。また、定点とは別に、学校等(保育園、幼稚園、小・中・高等学校、大学、専門学校)からも報告をお願いしていましたが、第27週以降、報告はありません。基幹定点からの成人麻しんの報告は、第21週の7人をピークに、減少し、第28、29週は1人でした。

詳しい情報については、横浜市感染症臨時情報《麻しん》をご覧ください。

([http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection\\_inf/report.html](http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html))

全国では、第28週に、麻しん73人、成人麻しん12人の報告がありました。報告がなくなっているわけではないので、まだ動向への注意は必要と思われます。



小児科定点からの麻しん患者報告については、麻しん予防接種歴もご記入いただいております。年齢による内訳を見ると、1歳未満と、学齢期で、接種歴なしが多くなっています。1歳未満の増加については、母体免疫の低下が示唆されます。1～2歳の接種歴ありについては、ワクチンの効果発現前に感染したか、1回で免疫がつかなかった(primary vaccine failure: PVF)と思われます。また、15歳以上では、接種歴ありの割合が高く、ブースターがかからなかったため(secondary vaccine failure: SVF)と考えられます。

#### < 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

性器クラミジア感染症で15～19歳の女性の報告が2人、尖圭コンジローマでも15～19歳の女性の報告が2人あり、若年女性への性感染症の拡がり心配されます。

#### 【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

#### 衛生研究所から

##### < ウイルス検査 >

2007年7月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点から30件(咽頭ぬぐい液)、基幹定点14件(髄液7件、咽頭ぬぐい液3件、血漿2件、喀痰・結膜ぬぐい液各1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎23人、ヘルパンギーナ3人、手足口病2人、結膜炎症状は2人、基幹定点は髄膜炎・脳炎は各2人、痙攣・意識障害・発疹・発熱・結膜炎各1人でした。

8月10日現在、小児科定点の気道炎患者3人、結膜炎患者1人の検体からアデノウイルス2型、手足口患者2人の検体からコクサッキーウイルスA16型、エンテロウイルス71型が1株ずつ分離されています。コクサッキーウイルスA16型が分離された手足口患者からはアデノウイルスも分離されています。

これに以外にPCR検査では、小児科定点のヘルパンギーナの患者2人、気道炎患者1人からコクサッキーウイルスA10型、ヘルパンギーナの患者1人、気道炎患者1人からコクサッキーウイルスA5型が検出されました。アデノウイルス2型が分離された気道炎患者1人からはコクサッキーウイルスA2型も検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

##### < 細菌検査 >

7月の感染性胃腸炎関係の受付は12菌株で腸管出血性大腸菌が1件検出されました。